

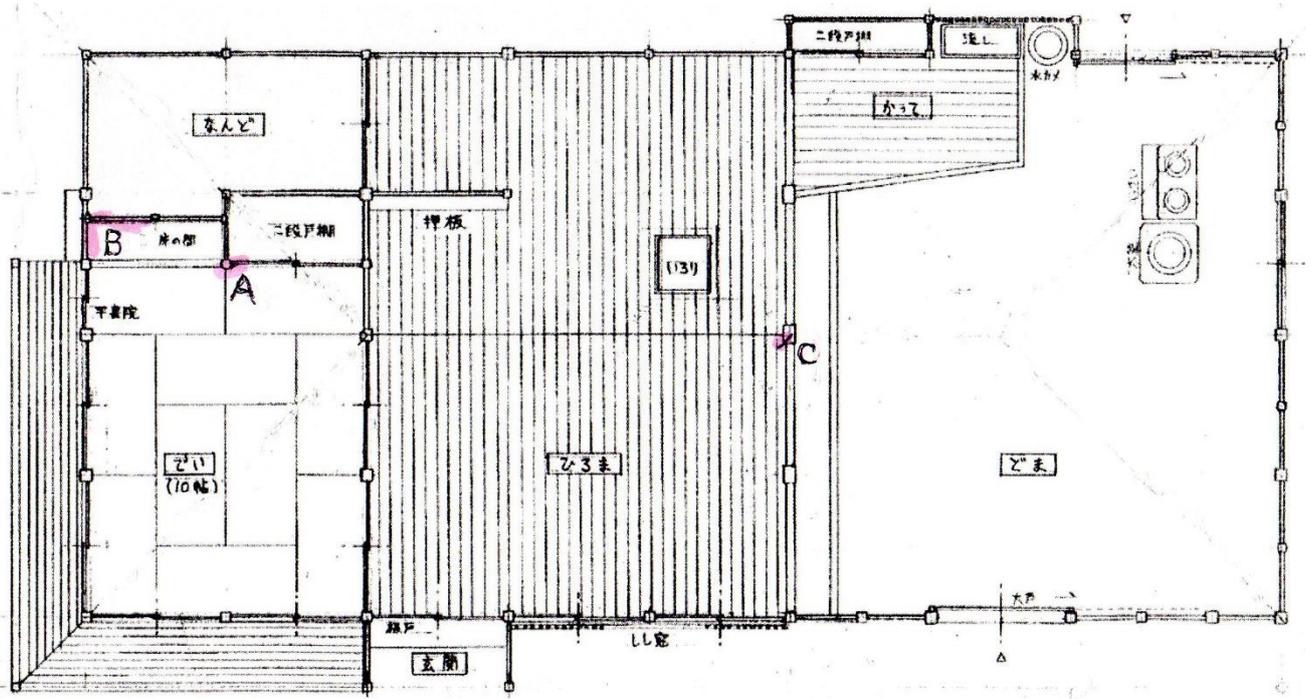
「戦争の傷痕と共に暮らす家」の創痕

戦争遺跡保存全国ネットワーク運営委員 東海林次男

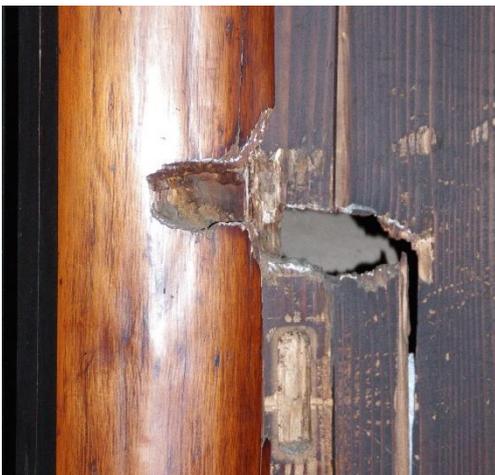
表記の家があることを知ったのは、2018年7月、坂本礼奈さんから「上井草・井口邸継承問題」というチラシをいただいたのがきっかけである。坂本さんは井口茂さんと何度も連絡を取り合い、信頼関係を築かれ、現場を見る機会をつくってくださった。同年10月30日に、旧母屋の前で作業をしながら待っていた井口茂さん（1938年3月生）に案内していただいた。

なお、身体の「傷」ではないので、刀による「創」を用いて報告する。

母屋の復元平面図①と写真を使って、「創痕」を紹介する。なお、坂本さんが素晴らしいアングルの写真をすでに公開されているので、それも参照していただきたい。



母屋は平面図の上が北で、玄関は南面し、東西に長い造りになっている。創痕が見られるのは大きく分けてA～Cの3か所である。Aは「でい」の北側に位置する「床の間」の床柱の創である。爆弾破片はB



の「床の間」より南から入ってきて、床柱の右側を削りながら2段戸棚の上段引戸を貫通している。床柱を通り抜ける際に飛び散った木片が引戸の表面をこすった創がついている。相当の勢いがあったと想像できる。

次に、Bの「床の間」である。写真①は左壁の裏側（平面図では縁側が切れた上の右側）である。板壁をテープでふさいでいる5か所が侵入口である。写真②が床の間の土壁で、左手が出口で、穴が漏斗

（じょうご）状に広がっている。ただし、上の2か所の出口は見られず、土壁中で留まったと思われる。

「床の間」正面壁の3つの創は脱出口から飛び出たものが当たったと推定できる。その3か所は貫通していない。「床の間」からはわからないが、「床の間」正面壁の裏側



左上端に貫通した漏斗状の創がある。〈写真①〉

左の白壁上部から侵入し、正面壁も突き抜けた結果と推測される。したがって、左右上部の白壁はその後の補修と思われる。



三か所目は、土間と「ひろ

〈写真②〉

ま」の境を区切る大黒柱の下の方にある。この柱は、「おかぐら」と呼ばれ、柱の外側を4枚の板で四角く囲って太く見せている。その板をぶち抜いており、Aの侵入口よりも南から飛んできた破片による創と思われる。

今回確認したのは、以上3か所であるが、帰宅後に改めて文献1を見たら、ダイドコロ（土間）境の上り口の上部にある「太い柱は戦中爆弾で傷んだため張板された」とのキャプションがあり、写真も掲げている。しかし、どの部分かは写真からは判断できなかった。

以上の観察から爆弾破片が飛んできたのは、南北にやや幅はあるが母屋の西側からと言える。

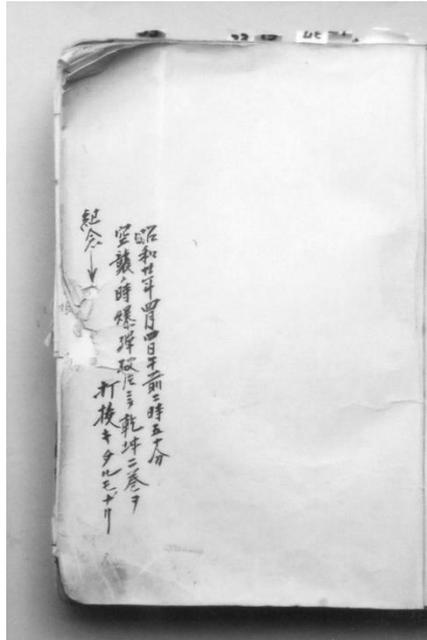
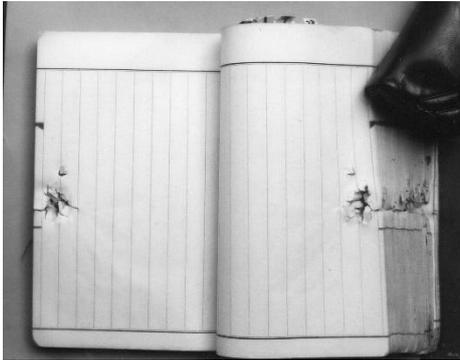
茂さん、お兄さん（1935年9月生）も口をそろえて爆弾2発が家の西側に投下され、一発は深いところで、もう一発は浅いところで爆発したようだと言っている。この時、79歳祖父の藤五郎さんは避難せずに母屋にいた。そして、お兄さんの話では、障子戸がすべて倒れていたという。爆風の影響と推測できる。そのときも可能性があるのだが、空襲の時は、茂さん（祖母のなつさんも一緒に、念仏を唱えていたという）は防空壕に、お兄さんは深さ4～5mあるL字形の野菜を貯蔵する穴蔵に避難したという。また、もう新しい家になったが、古い家には爆弾片による創があったと言う近所の住人がいるという。

東京大空襲の後、桃井第五国民学校に在籍していた茂さん（2年生）とお兄さん（4年生）は宮城県古川市に集団疎開したという。杉並区の場合、第一次が44年8～9月、第二次で45年3月に卒業する6年生と入れ替わりに2～5年生（3月現在）が集団疎開している。

爆弾が投下された時期については、坂本さんがいずれ明らかにしてくれるものと期待している。

次に、私が確認している爆弾破片による創痕が見られる3例を紹介する。

1、品川区北品川 東海寺の過去帳と墓石



墓石の創と過去帳も見ていたのに、したことがある。孔が開いた過去帳に時五〇分 空襲ノ時爆弾片ニテ乾坤記念→と墨書し、矢印が孔を指して創痕を見て、機銃掃射痕だという先入観があったためである。

機銃掃射痕と間違っ報告「昭和廿年四月四日午前二二巻ヲ打抜キタルモノナリいる。墓石の同一方向からの

その後、『明治ゴム化成八十年史』（1980年）と出会い、爆弾破片による創であると訂正した②。同書には4月4日未明、「敵機1機が山手より海の方角に向かつて明治ゴム品川工場をねらい打ちするかのよう襲いかかり、爆弾11個を投下し、ことごとくが炸裂した」とあり、工場配置図に爆弾投下場所を記した図も載っている。工場関係者30名が爆死している。

5基の墓石に創や破損が現在でも見られる。また、境内を区切るコンクリート塀にも貫通した孔や創があったが、新しい塀に替わり、なくなってしまった。

なお、目黒川に架かる要津橋を渡って南に行くと清光院があるが、その境内の石碑一基にも創が見られる。これもその時のものと推測している。

2、千代田区 日本橋川に架かる鎌倉橋



橋のたもとに、写真右の説明板が建っている。それには、「鎌倉橋欄干には、1944年11月の米軍による爆撃

と機銃掃射の際に受けた銃弾の跡が大小 30 個ほどあり、戦争の恐ろしさを今に伝えている」と。

ところが、厚さ 4 cm もある早乙女勝元監修・東京大空襲・戦災資料センター編『決定版 東京空襲写真集 アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録』(勉誠出版 2015 年)を購入し、さっそくページをめくっていたら、神田区鎌倉町に高射砲不発弾が落下した地点の写真が 4 枚載っていて、その中の 1 枚が鎌倉橋の物だった。そこには「高射砲不発弾が 12 時 45 分に落下してできた鎌倉橋際の弾痕。1944 年 11 月 24 日 13 時 30 分、日本写真公社国防写真隊・豊島正喜撮影」と。

この例も、私と同じような見方をしたようで、実は日本軍の高射砲不発弾による創だった。

3. 東大和市 旧日立航空機変電所

この場合は、爆弾破片と機銃掃射の両方の創である。詳しくは、東大和市史資料編 1：東大和市史編さん委員会編『軍需工場と基地と人びと』(東大和市 1995 年)を見ていただきたい。



1945 年 2 月 17 日 (78 名)、4 月 19 日 (6 名)、4 月 24 日 (27 名) の 3 回の空襲があり、工員、社員、学徒など 111 名が亡くなっている。

写真左下が変電所の外観で、無数の創や孔がある。左が内側から見た創で、出口が漏斗状になっているのがよくわかる。

右下は、給水塔で迷彩が施されていた。給水塔に登り、監視活動を行っている。その時に爆撃にあっている。無数の創があったが、2001 年に残念ながら取り壊されてしまった。その一部と慰霊碑が、変電所敷地内に移築保存されている。その後のことは、東大和・戦災変電所を保存する会編、発行『戦災変電所の奇跡』2017 年を参照されたい。



註

①平面図は、杉並区教育委員会編集、発行『杉並の民家 その三 井口家住宅母屋 (杉並区上井草)』2018 年 による。

②東京歴史教育者協議会編『新版 東京の戦争と平和を歩く』平和文化 2008 年